

氏名	まつ い くに ひこ 松 井 邦 彦
学位(専攻分野)	博 士 (医 学)
学位記番号	論 医 博 第 1823 号
学位授与の日付	平 成 15 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	Defferences in managemant patterns and outcomes, and impact of sex and its interaction with age on them among patients with acute myocardial infarction in Japanese hospitals. (わが国の病院に急性心筋梗塞で入院した患者について、施設の違い、患者の性別や年齢が、患者マネージメントやアウトカムへおよびす影響)
論文調査委員	(主 査) 教 授 福 原 俊 一 教 授 佐 藤 俊 哉 教 授 福 井 次 矢

論 文 内 容 の 要 旨

背景

急性心筋梗塞の患者について、心臓カテーテル検査・血栓溶解療法・経皮的冠動脈形成術、あるいは冠動脈バイパス術など、さまざまな侵襲的な検査や治療法が、わが国の多くの施設で行なわれている。

しかしながら、施設ごとに患者マネージメントの内容や患者アウトカムがどのくらい異なるのか不明である上に、患者の背景因子が、患者マネージメントや患者アウトカムにどのような影響を及ぼしているかについて、詳細な検討はほとんどおこなわれていない。

目的

わが国における急性心筋梗塞の患者について、(1)病院ごとに、患者マネージメントや患者アウトカムに差があるかどうか、そして(2)患者の背景、特に性別が、患者マネージメントや患者アウトカムに影響を与えているかどうか明らかにする。

方法

申請者は、日本国内の三次医療機関である4病院に、1995年7月からの一年間、急性心筋梗塞の診断で入院した全ての患者482名を対象に、カルテの記載からデータ収集をおこなった。

(1) 死亡率に影響を与える因子については、死亡を従属変数、患者の背景因子、施設などを独立変数として、logistic regression model を用いて分析した。同様に、在院日数に影響を与える因子については、在院日数を自然対数変換し、施設、患者の背景因子を独立変数として、linear regression model を用いて分析した。

(2) 患者の性別の違いによる、患者マネージメントと患者アウトカムの違いの有無については、年齢の影響も考慮するために60歳から80歳まで5歳ごとに層別化したモデルを作り、侵襲的な手技の施行と発症30日目の死亡について、性別による予測オッズ比を計算した。

結果

(1) 患者の年齢、性別、重症度などの臨床的な背景は、施設ごとに異なっていた。しかし、それらの臨床的な背景要因で補正しても、なおかつ施設間の死亡率や在院日数は、著しく異なっていた。

(2) 女性患者は男性患者より高齢であった。それぞれの患者マネージメントの内容や患者アウトカムについて、患者の臨床的背景と性別、年齢の interaction で補正すると、女性は男性に比べ、血栓溶解療法、心臓カテーテル検査、血行再建療法を受ける割合が低く、これらの違いは、年齢の高い患者群でより大きかった。また発症30日目の死亡率も、女性は男性に比べて高かったが、この違いは若年群でより大きかった。

考察

わが国の三次医療機関に急性心筋梗塞患者の診断で入院した患者の治療内容や在院日数、あるいは死亡率について、施設間で有意な相違が認められた。患者の性別も、患者マネージメントや患者アウトカムの相違と有意に関連していた。

これらの結果より、患者マネジメントや患者アウトカムに影響を及ぼしているのは、患者の年齢や重症度といった、患者の臨床的背景要因だけではない可能性が示された。

本研究のように、日本の医療の現状について、詳細で客観的な分析を行なうことは、患者アウトカムの向上を目標とした、より質の高い医療の提供に、有用であると考えられる。

論文審査の結果の要旨

近年、医療の質や効率性を決定する因子に関する臨床疫学的研究が、欧米諸国を中心に行なわれつつあるが、わが国においては緒についたばかりである。

本研究は、わが国における急性心筋梗塞患者について、(1)病院ごとに、患者マネジメントや健康アウトカムに差があるかどうか、そして(2)患者の背景、特に性別が、患者マネジメントや患者アウトカムに影響を与えているかどうかなどを明らかにする目的で行なった Retrospective Cohort Study である。解析方法としては、主として重回帰分析あるいはロジスティック回帰分析を用いた。

その結果、(1)患者の臨床的背景要因で補正しても、なおかつ施設間の死亡率や在院日数は、著しく異なっていた。(2)それぞれの患者マネジメントや患者アウトカムについて、患者の臨床的背景要因で補正すると、女性は男性に比べ、侵襲的な検査や治療を受ける割合が低かった。また発症30日目の死亡率も、女性は男性に比べて高かった。

これらの結果より、患者マネジメントや患者アウトカムに影響を及ぼしているのは、患者の年齢や重症度といった臨床的背景要因だけではない可能性が示された。

以上の研究は、わが国の急性心筋梗塞の医療の現状について、詳細で客観的な分析を行なったものであり、患者アウトカムの向上を目標とした、より質の高い医療の提供に、寄与するところが大きいと考えられる。

したがって、本論文は博士(医学)の学位論文として価値のあるものと認める。

なお、本学位授与申請者は、平成15年3月6日実施の論文内容とそれに関連した研究分野並びに学識確認のための試問を受け、合格と認められたものである。